北陸における古墳出現前後の墳墓の変遷-東西墳墓の土器配置系譜整理の一環として-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 駿台史学会 公開日: 2012-06-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 古屋, 紀之 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/13376

駿台史学　第120号　107-136頁，2004年2月
SUNDAI SHIGAKU (Sundai Historical Review)
No. 120, February 2004. pp. 107-136.

北陸における古墳出現前後の墳墓の変遷

―― 東西墳墓の土器配置系譜整理の一環として ――

古　屋　紀　之

要旨　日本の古墳時代の開始については，突如大和に巨大な前方後円墳が出現し，その影響下に割合に短期間のうちに「古墳」という墓制が斉一性をもって各地にひろまったと理解されてきたが，近年の研究では弥生時代後期墓制との連続性が強調される面もある。それは，墳丘外における土器や埴輪の配置から復原される祭祀に著しく表れている。

本稿では東日本の初期の古墳に見られる墳頂における土器配置の源流が，西日本の後期弥生墳丘墓に求められることを確かめるために，その間の地域，特に近年資料の増加の著しい北陸地方の墳墓における土器配置の変遷を追った。なぜなら，当地域の墓制は弥生後期の段階では西日本的な様相を示すが，古墳時代前期には東日本的な様相に変化することから，両地域の交流の接点に位置すると考えられるからである。

分析の結果，当地域では弥生墳丘墓から古墳への変遷がいくつかの画期をもちながらも，総体的に漸移的に変遷していったことがうかがえ，また墳頂における土器配置も同様な傾向を見せる。しかし，中部高地・関東地方など，北陸以東の地域の初期古墳のそれとは器種構成において違いを見せ，それらとの直接的な関連性はみられなかった。中部高地・関東地方の初期古墳の墳頂土器配置の源流は山陰・中部瀬戸内地域の弥生墳丘墓にあることは間違いないようだが，直接的な影響は，どうやら山城・近江・伊勢・東海西部のどこかにあるようだ。

キーワード：古墳出現期，北陸，墳墓，土器配置，葬送儀礼

Ⅰ　はじめに

近年，重要な前期古墳の発掘調査が相次ぎ，古墳の出現というテーマについての研究が益々盛んになった。また，そのことには弥生後期から庄内式併行期の土器研究・墳墓研究のめざましい発見・進展も重要な役割を果たしており，従来までの古墳出現観が改められつつあるといえよう。北陸においても該期の墳墓資料が飛躍的に増え，土器編年も細かく整備されてきた。

筆者はこれまで古墳の出現というテーマについて墳墓における土器配置の研究という観点からアプローチしてきた。すでに東日本・西日本の様相についておおまかな様相は概観してきたが[1]，両分析のあいだにはわずかな地域・時間をはさみ分析を及ぼしていない範囲があった。それは旧国名で播磨・南丹波・山城・近江・大和宇陀などの地域であり，また北陸・東海西部

地方は前々稿では弥生後期まで遡った分析は行っていなかった。そこで，はじめ本稿では東西の墳墓の系譜整理を目的としてその「間の地域」の分析を試みようと計画したが，この地域の土器配置が判明している墳墓資料が極めて少ないため安定的な結論を導き出せるとは思えなかった。しかし，その中でも北陸については近年新たに資料が増加してきており分析対象地域とするのにふさわしいと思えた。また，本稿の分析結果からもわかるとおり，当地域の墓制は弥生時代には西日本的な様相を示し，古墳時代には東日本的な様相に変わるために，両時代の転換点で東日本の窓口的な役割を果たしたのではないかという予想もあった。そのような理由もあって今回は，北陸の墳墓における土器配置を中心に分析を行い，他の要素との関わりについても検討を行う。また，周辺地域については最後に補足的に取り挙げ，展望を述べることにしたい[2)]。

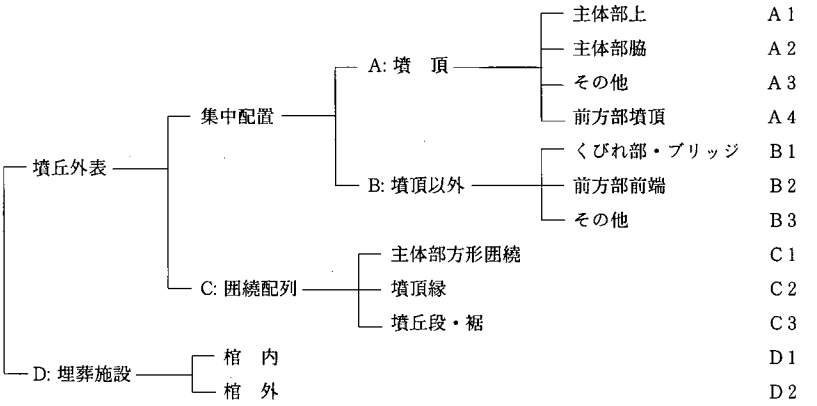
Ⅱ　資料の選択と編年および各資料の様相

今回の分析対象地域は旧国名で越前・加賀・能登・越中の範囲とし，分析資料の選択は基本的に年代と土器配置が明確なものとした。また，資料の編年は堀大介の編年（堀 2002）を基準とするが，文中での時期の呼称は「猫橋式」（弥生後期初頭）・「法仏式古段階」（弥生後期中葉）・「法仏式新段階」（弥生後期後葉）・「月影式」（庄内式前半段階）・「白江式」（庄内式後半段階～古墳前期前半初頭）・「古府クルビ式」（古墳前期前半）・「高畠式」（古墳前期前半末～前期後半）とする。周辺地域の土器編年との対応関係は第１表に示したものにもとづいて記述を進める[3)]。

なお，土器配置の分類および概念は前稿・前々稿の定義に従うものとして，ここでは分類（第１図）を提示するに留める。分析資料の詳細について以下に述べることにする。

第１表　土器編年併行関係対応表

<table>
<tr><th rowspan="2">時期</th><th colspan="2">山　陰</th><th colspan="2">畿　内</th><th colspan="4">北　陸</th><th>東　海</th><th>東日本墳墓</th></tr>
<tr><th>花谷</th><th>赤沢</th><th>関川</th><th>寺沢</th><th colspan="3">堀</th><th>田嶋</th><th>赤塚</th><th>古屋</th></tr>
<tr><td rowspan="2">弥生時代
後期前葉</td><td rowspan="2">（波来浜）</td><td rowspan="2">草田１</td><td rowspan="6"></td><td rowspan="6"></td><td>様相１</td><td rowspan="2">甑谷</td><td rowspan="2">猫橋</td><td rowspan="2">漆町１群</td><td rowspan="2"></td><td rowspan="8"></td></tr>
<tr><td>様相２</td></tr>
<tr><td rowspan="2">弥生時代
後期中葉</td><td rowspan="2">九重</td><td rowspan="2">草田２</td><td>様相３</td><td rowspan="4">小羽山</td><td rowspan="4">法仏</td><td rowspan="2">漆町２群</td><td rowspan="2">山中Ⅰ</td></tr>
<tr><td>様相４</td></tr>
<tr><td rowspan="2">弥生時代
後期後葉</td><td rowspan="2">的場</td><td rowspan="2">草田３</td><td>様相５</td><td rowspan="2">（＋）</td><td rowspan="2">山中Ⅱ</td></tr>
<tr><td>様相６</td></tr>
<tr><td rowspan="4">庄内前半</td><td rowspan="4">鍵尾</td><td rowspan="3">草田４</td><td>纒向１</td><td>庄内０</td><td>様相７</td><td rowspan="4">風巻</td><td rowspan="4">月影</td><td rowspan="2">漆町３群</td><td rowspan="3">廻間Ⅰ</td><td rowspan="6">１期</td></tr>
<tr><td rowspan="2">纒向２</td><td>庄内１</td><td>様相８</td></tr>
<tr><td rowspan="2">庄内２</td><td>様相９</td><td rowspan="2">漆町４群</td></tr>
<tr><td rowspan="2">草田５</td><td rowspan="3">纒向３古</td><td rowspan="3">庄内３</td><td>様相10</td></tr>
<tr><td>庄内後半</td><td rowspan="2">大木
権現山</td><td rowspan="3">草田６</td><td>様相11</td><td rowspan="5">長泉寺</td><td rowspan="2">白江</td><td>漆町５群</td><td rowspan="2">廻間Ⅱ</td></tr>
<tr><td rowspan="4">古墳時代
前期前半</td><td>様相12</td><td rowspan="2">漆町６群</td><td rowspan="2">２期</td></tr>
<tr><td rowspan="2">纒向３新</td><td rowspan="2">布留０</td><td>様相13</td></tr>
<tr><td rowspan="2">小谷</td><td rowspan="2">草田７</td><td rowspan="2">纒向４</td><td rowspan="2">布留１</td><td>様相14</td><td rowspan="2">古府クルビ</td><td>漆町７群</td><td rowspan="3">廻間Ⅲ</td><td>３期</td></tr>
<tr><td>様相15</td><td>漆町８群</td><td>４期</td></tr>
<tr><td rowspan="3">古墳時代
前期後半</td><td rowspan="3"></td><td rowspan="3"></td><td rowspan="2">纒向５</td><td rowspan="2">布留２</td><td>様相16</td><td rowspan="3">木田</td><td rowspan="3">高畠</td><td>漆町９群</td><td rowspan="3">松河戸Ⅰ</td><td>５期</td></tr>
<tr><td>様相17</td><td>漆町10群</td><td>６期</td></tr>
<tr><td></td><td>布留３</td><td>様相18</td><td>漆町11群</td><td>７期</td></tr>
</table>



第1図　土器・埴輪配置類型の分類（古屋 2002）

越　　前

(1)　**王山古墳群**　福井県鯖江市東鯖江町・上鯖江町　（斎藤優ほか 1966）

鯖江台地の南端，独立丘陵上に展開する総数 40 基あまりからなる墳墓群。

王山 1 号墳　時期：猫橋式　土器配置：B3

方形，11×8.3 m。主体部は墓壙を掘っているが，棺痕跡は不明。副葬品無し。頭位から赤色顔料。周溝底から高杯 1・甕 9 が出土。

王山 3 号墳　時期：法仏式新段階　土器配置：A1・B3

方形，8 m。主体部は墓壙を掘っているが，棺痕跡は不明。副葬品無し。主体部上の表土下の陥没坑の黒色土中から壺・高杯などの土師器片出土（A1)。その下層にあたる墓壙掘りこみ面において，主体部内および周囲から礫群が散在した状況で検出された。また，墳頂平坦面縁の 1 ヶ所に特殊な石組みがある。周溝からは近江・伊勢湾地方系の広口壺・高杯・器台などが出土（B3)。

王山 4 号墓　時期：猫橋式　土器配置：A1・D1

方形，11.7 m。墳頂に 2 基の主体部が存在。第 1 主体（中心主体）は粘土槨に木棺をおさめる。副葬品は無く，主体部内から壺の破片が出土（D1)。主体部上の陥没坑より土器片出土（A1)。

第 2 主体も第 1 主体と同じく粘土槨に木棺をおさめており，副葬品が無い。粘土の中から土器片出土。また，主体部上の陥没坑より土器片出土（A1)。第 1・2 主体ともに主体部周辺から礫群が出土。

王山 5 号墓　土器配置：A1・B3

方形，10.4×10 m。墳頂に 2 基の主体部。第 1 主体の上部を破壊して第 2 主体が造られている。第 1 主体は墓壙を掘っているが，棺痕跡は不明。副葬品無し。第 2 主体も墓壙を掘ってい

るが，同様に棺痕跡は不明で副葬品は無い。ただし，主体部上から鉄剣 1，高杯・壺などが出土（A1)。周溝からは壺が数個体出土。

(2) **小羽山墳墓群**　福井県丹生郡清水町小羽　(古川 1995・97)

小羽山丘陵上に展開する総数 59 基からなる墳墓群。このうち弥生時代の墳墓とされたものは四隅突出形・方形墳丘墓からなる 35 基。他に前方後円 2・帆立貝 1・前方後方 1・円 9・方 3 の計 15 基の古墳と，未調査のため時期不詳な方形墓 9 基がある。

小羽山 30 号墓　時期：法仏式古段階　土器配置：A1

四隅突出形，方台部は 33×28 m。主体部は墳頂に 1 基のみで，墓壙に箱形木棺をおさめる。副葬品は碧玉製管玉 103，ガラス製管玉 10，ガラス製勾玉 1，鉄製短剣 1。玉はばら撒かれたと考えられている。また，朱が使用されている。主体部上の陥没坑からは 40 個体にもおよぶ土器群が出土（A1)。それらにガラス製管玉 1 と石杵 1 がともなう。

小羽山 26 号墓　時期：法仏式新段階　土器配置：A1

四隅突出形，方台部は 34×32m。主体部は墳頂に 6 基あり，1 号埋葬が中心主体。1・2・4～6 号埋葬は墓壙に箱形木棺をおさめているが，3 号埋葬だけは割竹形木棺を使用している。副葬品は 1 号埋葬に碧玉製管玉 1，2 号埋葬に杯 1，3 号埋葬に鉄鏃 1，4 号埋葬に碧玉製管玉 15，5 号埋葬に翡翠製勾玉 1 などがある。主体部上の陥没坑に土器があるのは 1・2・3 号埋葬であるが，中でも 1 号埋葬にはおよそ 50 個体もの土器が出土した（A1)。副葬品の内容においては中心主体である 1 号埋葬と他の主体部の間に格差は見られないが，主体部上の土器量は中心主体が他を圧倒している。

小羽山墳墓群では他に 17 号墓などで主体部上から土器が出土し，36 号墓でいわゆる墓壙内破砕土器供献[4] が行われている（D2)。

(3) **片山鳥越墳墓群**　福井県丹生郡清水町片山字鳥越　(古川 2003)

弥生時代後期の方形墓 8 基・古墳時代前期～中期にかけての古墳と見られる円墳 1 基・張出し付円墳 1 基の計 10 基からなる墳墓群。

片山鳥越 5 号墓　時期：法仏式新段階　土器配置：A1

方形，16.5×14.0 m。墳頂に直列する 2 基の主体部がある。第 1 埋葬は墓壙に箱形木棺をおさめるが，木棺の裏込めに礫を使用している。副葬品はないが遺骸の頭部がおかれたと思われる付近に赤色顔料がみとめられた。主体部上の陥没坑から高杯数個体が出土（A1)。土器の下層に礫群が散在した。第 2 埋葬は墓壙に箱形木棺をおさめる。副葬品は鉄製短剣 1 が出土。

(4) 長泉寺山墳墓群 福井県鯖江市長泉寺山 (斎藤優ほか 1966)

長泉寺山の丘陵尾根線上に展開する総数 90 基にもおよぶ墳墓群。西山・高山・白山などいくつかの支群に分けられる。

長泉寺西山 1 号墳 時期：法仏式新段階 土器配置：A1・D1

円形，径 12〜13 m。主体部は墓壙に舟形？木棺をおさめる。副葬品は管玉 14 と直口壺 1 (D1)。また，玉の付近にベンガラ少量。主体部上の表土下 40 cm の陥没坑の黒色土中から土師器高杯 2，壺 2 が出土 (A1)。報告書の記載から壺のうち 1 個体は加飾壺と思われる。

長泉寺西山 3 号墳 時期：古府クルビ式 土器配置：D1

円形，径 12 m。方形の可能性あり。主体部は墓壙に舟形木棺をおさめる。副葬品は勾玉 6，管玉 33，丸玉 2 (1 個は切小玉？)，小玉 17，土師器小型丸底土器 1 (D1)，小形広口壺 (D1)。

(5) 原目山墳墓群 福井県福井市原目町 (大塚 1986・90)

原目山に展開する総数 64 基以上の墳墓群。その内北西に張り出した尾根上に立地する 3 基の方形墳丘墓と 1 基の自然丘を利用した墳丘墓からなる支群において，主体部上土器配置が見られる。

原目山Ⅰ号墓 時期：月影式 土器配置：A1

方形，25×20 m，高さ 4 m。主体部は墳頂中央に 1 基のみで，2 段墓壙に木棺をおさめ，棺内に青い砂が敷かれる。また棺の裏込めに河原石が所々に用いられていた。副葬品は碧玉製管玉 323，ガラス小玉 728，鉄刀 1，鉄短刀 1，鉄片 1。主体部上から台付無頸壺・有段口縁壺・高杯・器台など多くの土器が出土 (A1)。

原目山Ⅱ号墓 時期：月影式 土器配置：A1・A2

不整方形，20×30 m，高さ 4 m。墳頂に 5 基の主体部が存在する。すべて墓壙に木棺をおさめている。副葬品はガラス小玉・鉄製武器 (大刀・剣・槍先)・銅鏃・鉄製工具 (鉋) などがあるが，5 号埋葬の素環頭大刀が特筆される。盗掘を受けた可能性のある 3 号主体以外の主体部では主体部上から土器が出土しているが，1・2 号埋葬では土器群の中央に河原石の立石が，4・5 号墓では土器群に角礫による立石が伴う (A1)。なお公表されている遺構配置図を参考にすれば，3 号主体部では墓壙脇から土器が出土しているようだ (A2)。

原目山Ⅲ号墓 土器配置：A1

ひとつの高まり上の平坦面に 3 基の小形方形周溝墓と 10 基の土壙墓が立地する。土壙のうち 3 基は小形方形周溝墓の主体部として作られたものである。副葬品はいくつかの土壙から鉄刀が出土している。墳頂平坦面の表土下には土器群のまとまりが 10 ヶ所存在し，凝灰岩小角礫の群集が 4 ヶ所みとめられた。土器群のまとまりのうちいくつかは主体部上に伴うもので，

5・6・7・9・10号土壙および2号方形周溝墓主体部（11号土壙）からそれらが検出されている。

原目山Ⅴ号墓　時期：月影式　土器配置：A1

不定形の自然丘の頂部に2基，斜面に1基の土壙が存在する。このうち斜面に作られた3号土壙の内および主体部上から土器が出土している（A1）。

(6)　袖高林墳墓群　福井県永平寺町諏訪間　（赤澤・御嶽 1999）

福井市南部に位置する城山から南東へ派生する低丘陵線上に，13基の墳墓が立地する。大きく南北に分かれ，1号墓をふくむ南支群は尾根上に連続する4基の方形台状墓からなる。

袖高林1号墓　時期：月影式　土器配置：B3・D2

方形，10.4×9 m。主体部は墳頂に5基存在し，中心主体である第2主体部を取り囲むように他の4基が配置されている。第1～3主体部は墓壙に箱形木棺を納めている。第4・5主体部の木棺痕跡は不明である。副葬品は第2主体部から鉄製大刀1が出土したのみである。また，第2主体部内から器台の受け部が出土しているが，これは出土状況から棺蓋上に置かれていたと考えられている（D2）。南東陸橋部の地山直上に土器片が集中して出土する箇所があり（B3），この中の破片が上述の第2主体部から出土した器台受け部と接合した。

(7)　安保山墳墓群　福井県福井市安保町　（青木 1976）

安保町背後の低丘陵の尾根頂部に立地する。前方後円墳2・不整形な前方後方墳1・円墳2基で構成される。

安保山1号墳　時期：古府クルビ式　土器配置：D1

前方後円形，31.8 m。後円部径18.3 m。主体部は後円部中央の粘土槨で割竹形木棺を内蔵する。棺内からは朱の痕跡が検出され，土師器単口縁壺1が細片となって1ヶ所にまとまって出土した（D1）。また，鉄錆の痕跡があることから鉄器の副葬が推定されている。墳丘周縁のテラス地山直上から布留型甕が出土している。

(8)　三尾野古墳群　福井県福井市三尾野町・南居町　（坂ほか 1993）

日野川の右岸，独立丘である城山から南西に派生する尾根線上に立地する古墳群。3支群あり，円墳25基，方墳15基からなる。

三尾野2号墳　時期：高畠式　土器配置：A1（鏡をともなう）

方形，12.59×14.59 m。墳頂に3基の主体部がある。第1埋葬は中心主体で，2段墓壙に箱形木棺をおさめている。副葬品は棺内から鉄剣1・鉄刀子1が出土。主体部上の陥没坑からは珠文鏡1・土師器小形短頸壺1・高杯2が出土（A1）。珠文鏡よりも土器のほうが若干下層から出土した。第2主体は墓壙に割竹形木棺をおさめ，副葬品は棺内から鉄製大刀1が出土。主

体部上は盗掘によって撹乱されており，その盗掘坑より石製紡錘車1・土師器直口壺1が出土。第3主体は墓壙におそらく箱形木棺をおさめたと推定されている。副葬品は無い。主体部上からは土師器片が出土しているが，量的に少ない。

加　賀

(9) 七ツ塚墳墓群　石川県金沢市吉原　(福井県教委 1976)

森下川の左岸，津幡・森本丘陵の北西端にあたる丘陵上の平坦面と北および東にのびる尾根上に立地する墳墓群。谷を挟んで東隣の台地上には，同時期の集落跡である塚崎遺跡が立地する。6基の方形台状墓（1・1下・4・11・12・14号），9基の方形周溝墓（13・15～22号）および区画を持たない埋葬施設群38基以上からなるとされる。

時期：月影式　土器配置：A1

およそ，主体部の構造は墓壙に箱形木棺をおさめるものである。副葬品は玉類，鉄製武器・工具類が散発的に出土する。主体部上から土器が出土する例は，1号墓第3主体（壺1），18号墓第2主体（高杯4・器台1），18号土壙墓（器台1）である（A1)。なお，3号墓の主体部上からは礫群が検出されるものの土器は伴っていなかった。

(10) 小菅波4号墳　石川県加賀市小菅波町　(小菅波遺跡発掘調査団 1978)

時期：白江式　土器配置：A1

紅沼盆地を望む台地上に立地する。前方後方形，16.6 m。主体部は墳頂に2基存在する。両者とも墓壙に箱形木棺をおさめる。副葬品は1号主体よりガラス小玉5・鉇1・鉄片1，2号主体より鉄鏃2・鉇1が出土。土器は主体部上から有文二重口縁壺1（A1)，周溝から畿内系加飾壺を含む装飾壺などが複数個体出土している。

能　登

(11) 国分岩屋山古墳群　石川県七尾市国分町　(土肥 1985)

邑知地溝帯の北端，地溝帯に東面する丘陵尾根上に立地する，前方後方墳2（1・2号）・方墳8・円墳2からなる古墳群。方墳3基（4～6号）が発掘調査された。

国分岩屋山4号墳　時期：古府クルビ式　土器配置：A1

方形，14.6×10.5 m。主体部は墳頂に1基あり，墓壙を掘りこんでいるが棺痕跡は不明。副葬品は無く，埋土に少量の炭化物が混入している。主体部上から大形直口壺1・蓋1が出土。特に大形壺は「底部に体部から上が落ち込んだ状態で出土し，ほぼ原位置を保っていた」(報告書)。

国分岩屋山6号墳　時期：古府クルビ式　土器配置：A1・A3

方形，10.5×11 m。主体部は墳頂に1基あり，報告によると2段墓壙に割竹形木棺が収められたと推定されている。副葬品は無い。主体部上から高杯1・蓋1・甕破片が出土している（A1）。また，墳頂平坦面の主体部から少し離れた地山直上から大形壺1・高杯1・器台1が出土した（A3）。

⑿ **国分尼塚古墳群**　石川県七尾市国分町尼塚　（富山大学人文学部考古学研究室 1983）

邑知地溝帯の北端近くの独立丘陵上に立地する，前方後方2・方墳1からなる古墳群。

国分尼塚1号墳　時期：古府クルビ式　土器配置：A1・A3・B1

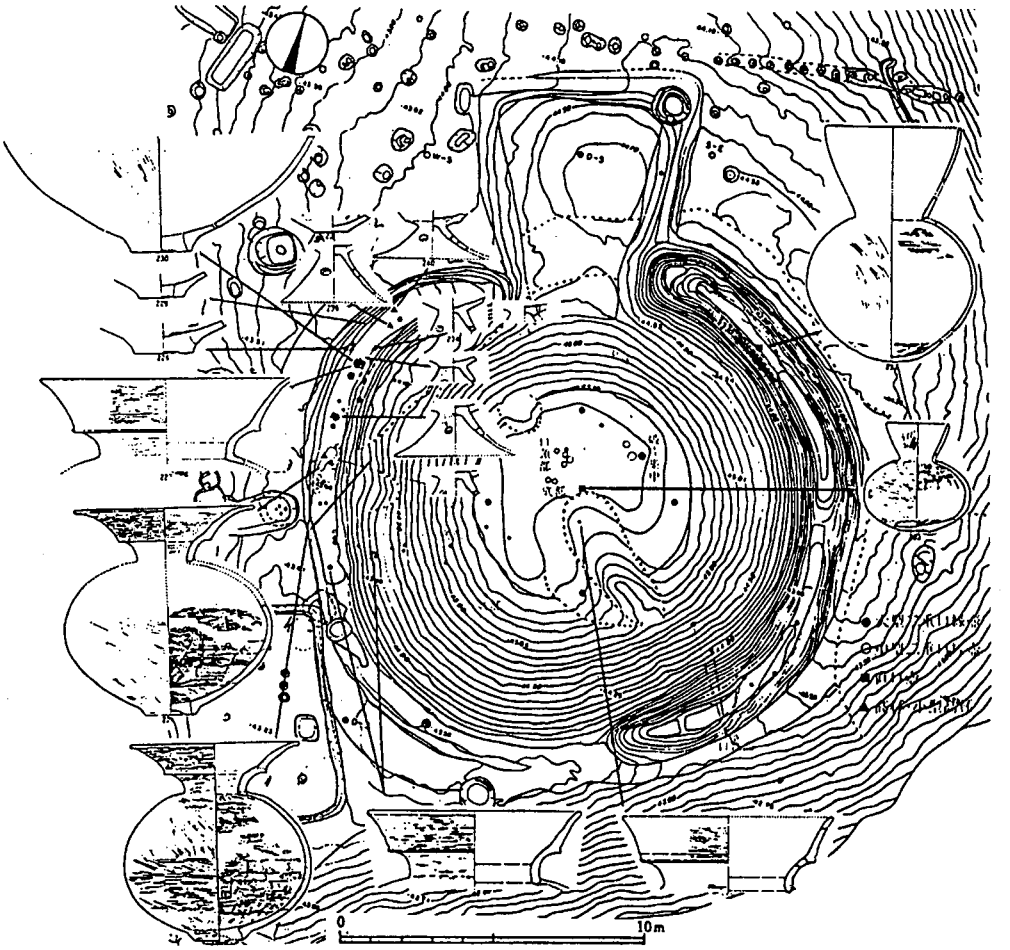
前方後方形，52.5 m。後方部28 m。主体部は後方部中央に1基存在する。構築墓壙に割竹形木棺をおさめているが，棺床を囲む特殊な木組み施設が検出されている。副葬品は豊富で，棺内から夔鳳鏡1・勾玉1・管玉10・鉄刀1・鉄短剣3・鉄短刀1・鉄槍1・鞆1（銅鏃57）・鉄鏃4・鉄斧3・鉄鑿3・鉋2・鉄鍬先1・箸5以上，棺外から鉄槍1・黒漆塗り小品が出土。主体部上から底部・口縁部を打ち欠かれた土師器二重口縁壺1が出土（A1）。「主体部上の溝状遺構」から出土したとされるが，この溝状遺構は木棺の腐朽に伴う陥没坑と考えられる。そのほか後方部墳頂平坦面の南東隅から土師器片が集中して出土した。壺・高杯などで「粉砕されたと」考えられている（A3）。また，両くびれ部からは多くの土師器が出土している。

⒀ **宿東山古墳群**　石川県羽咋郡押水町宿　（北野ほか 1987）

日本海を西に臨む宝達山地の西縁に所在し，小谷を挟んだ東西の台地上に立地する古墳群。西支群は前方後方2（4・8号）・方3（5・6・7号）・墳形不明3（9・10・11），東支群は前方後円1（1号）・円2（2・3号）で構成される。

宿東山1号墳　時期：古府クルビ式　土器配置：A1・A3・B3・C2？

前方後円形，21.4 m。後円部径15.8 m。主体部は後円部中央に掘り込まれた2段墓壙に箱形木棺をおさめる。副葬品は棺内から方格規矩四神鏡が1面出土しており，鏡付近に朱・炭化物が出土している。主体部上中央付近の大部分は盗掘坑によって破壊されていたが，土師器直口壺1個体が撹乱をまぬがれて残されていた（A1）。後円部平坦面の東よりの所に土器片が集中する地点が1箇所あるが（A3），報告者はかたづけの跡と解釈している。儀礼に使用されたと考えられる土器のほとんどは北西～西の墳丘斜面から周溝内にかけて出土している。器種は広口の大形二重口縁壺・中形二重口縁壺・高杯などがある。二重口縁壺はすべて焼成後に底部を穿孔している。前々稿では，二重口縁壺があわせて6個体以上あることから墳頂縁での囲繞配列を想定していたが，出土状況からは囲繞配列と断定できないため，本稿では可能性に留めたい（第2図）。



第2図　宿東山1号墳土器出土状況（埋蔵文化財研究会 1989）

越　中

⑭　千坊山遺跡群　富山県富山市・婦負郡婦中町　（大野 2002）

富山平野において山田川と井田川の合流地点付近の西側は弥生時代後期の法仏式期から古墳時代前期後半の高畠式期にいたるまで多くの墳墓・集落が集中して営まれた地域であり，千坊山遺跡群と総称される。墳墓は山田川にそって南北に続く丘陵上に立地し，北から杉谷古墳群・王塚古墳・勅使塚古墳・添ノ山古墳・向野塚・六治古塚・鏡坂墳墓群・富崎墳墓群・富崎千里古墳群などがある。

六治古塚　富山県婦負郡婦中町長沢字向野　（大野 2002）

時期：月影式　土器配置：A1

四隅突出形，方台部1辺 24.5 m。高さ 5.1 m。主体部は未調査だが，墳頂にて中心主体ある

いはその陥没坑と考えられるプランが検出されており，主体部上と考えられる位置から壺・高杯・器台・蓋などが出土。また，墳丘斜面や周溝からも土器が出土している。

杉谷4号墓　富山県富山市杉谷字上野山畑　(藤田 1974)

時期：白江式　土器配置：A1

杉谷古墳群は四隅突出1・前方後方1・方8・円1で構成される。4号墓は四隅突出形で方台部25×25 m，突出部を含めると47×47？m におよぶ。高さ3.9 m。主体部は未調査だが，墳頂中央部にて主体部の木棺腐朽に伴うと考えられる陥没坑を検出。25 cm 大の亜角礫が置かれ，その周囲から土器片が出土した。

⑮　谷内古墳群　富山県小矢部市埴生字谷内　(宇野ほか 1988)

小矢部市西部の石動丘陵の尾根線上に立地する。前方後円1（16号墳），前方後方？1，方14，円4の計20基の古墳および10ヶ所の古墳候補地からなり，7つの支群にわけることができる。前方後円墳である16号墳は3基の方墳を伴い，一支群を形成している。

谷内16号墳　時期：古府クルビ式　土器配置：A3

前方後円，47.56 m。後円部径23.05 m。主体部は後円部墳頂に掘り込まれた墓壙に木棺を直葬したと推定されている。副葬品は棺内と推定される位置から鉄剣1・鉇1・鉄製鍬先1が出土している。後円部墳頂から土師器壺1が出土している（A3)。報告書によれば「土師器細片が47点出土している。主体部東端の南東約3 m（中略）付近で約2 m 平方の範囲から出土した。出土層位は主体部を被覆する粘土混りの黄褐色粘土質より上の盛土中からであり，比較的まとまった状態で埋積している。破片はすべて細片となっており棺を埋めた後，墳丘を完成する過程で祭祀に用い破砕して埋めたと想像することが可能である。これらの土師器は細片であるが，壺形土器1個体分と推定でき，口縁部，頸部，底部の破片を確認できる」。

⑯　関野古墳群　富山県小矢部市石坂　(宇野ほか 1987)

小矢部市西部の丘陵から東に伸びた尾根上およびその下方に立地する，前方後円1（1号墳），大形円1（2号墳），小形円5からなる古墳群。

関野1号墳　時期：高畠式　土器配置：C2？

前方後円形，推定65 m。後円部径推定34 m。後円部のほとんどが削平されており，主体部は現存しないが，過去の記録では礫床粘土槨であり，鉄刀1・銅鏃20が出土したという。土器は北側くびれ部に設定された調査区から底部穿孔二重口縁壺5以上・小型丸底土器1・柱状脚高杯3・小型器台1が「盛土流土に包含されたかたちで出土」。おそらく墳頂にあったものが墳丘の崩落とともに転落したものと考えられる。底部穿孔二重口縁壺の個体数が多いことから，墳頂縁における囲繞配列の可能性がある（C2)。

Ⅲ　土器配置の分析

前章で紹介してきた墳墓の土器配置について，前稿と同様に①配置位置，②器種構成，③使用土器系譜，④出土時の状態，⑤墓の階層性との関係，の5項目に注意しつつ，各土器配置類型と関連事項についてまとめる。

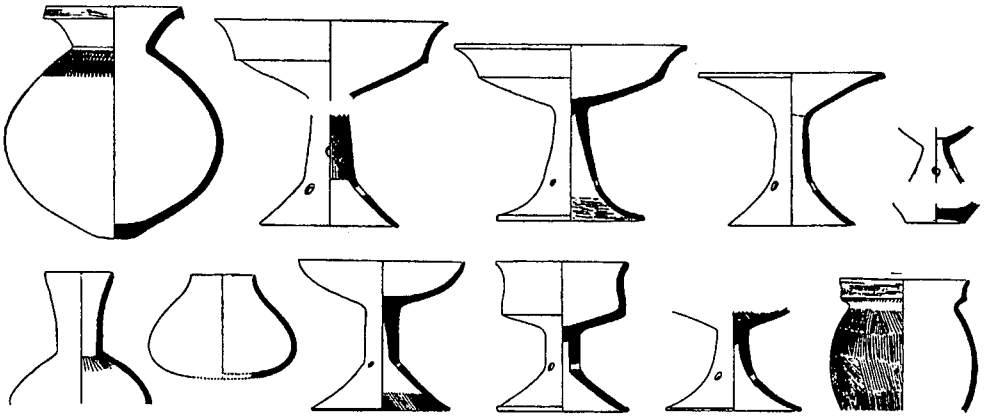
Ⅲ－1　主体部上集中配置（A1類型）および器種構成

北陸の主体部上の土器配置は越前で早くから開始され，後期初頭の猫橋式期では王山墳墓群4号墓があり，次の法仏式期で小羽山墳墓群・片山鳥越5号墓・王山3号墓・西山1号墓など類例が増える。とくに小羽山30号墓・26号墓第1主体など大形の墓壙を持つ埋葬には40～50個体におよぶ多量の土器が主体部上に置かれているが，その他の墳墓では墳丘規模が劣るせいか，こうした多量配置は見られない。このような多量配置のあり方は山陰における墓の階層性と土器量が相関することと共通するが，一方で等質的な墳墓群における主体部上土器配置のあり方は近畿北部地方などと比べると散発的であり，中国地方山間部の集団墓のあり方と共通する。法仏式期において主体部上集中配置は越前以外では今のところ例がない。しかし，越中の千坊山遺跡群中の富崎墳墓群において四隅突出型墳丘墓の造営がすでに始まっており，この時期に造営された富崎3号墓の墳頂平坦面が未調査であるため確実ではないが，主体部上土器配置を行っている可能性もあろう[5]。

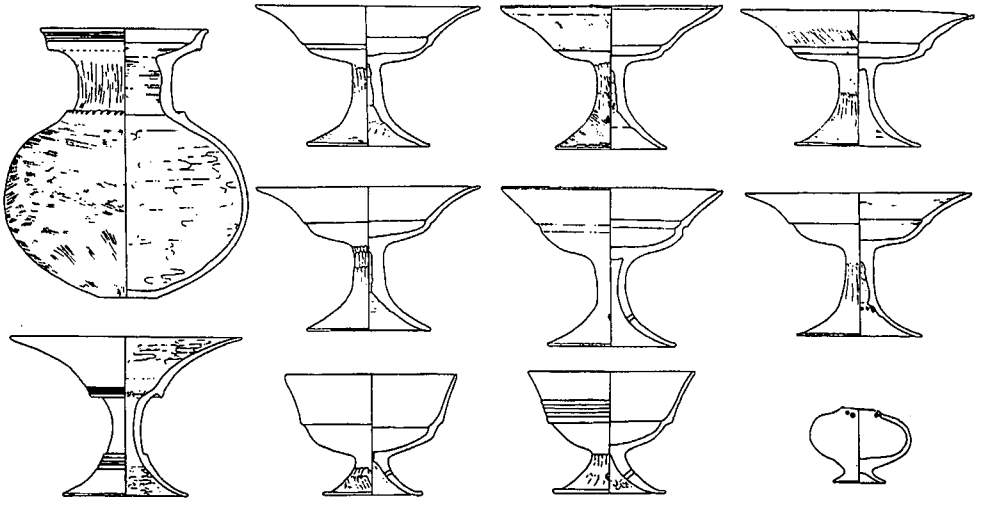
月影式期になると各地域で主体部上土器配置が始まる。越前では原目山墳墓群，加賀では七ツ塚墳墓群，越中では六治古塚墳丘墓などである。能登ではまだ類例が無い。原目山Ⅰ・Ⅱ号墓では小羽山30・26号墓に見られる多量配置にはおよばないものの多くの土器を置いている。

白江式期の越前の資料が未発見であるが，加賀では小菅波4号墳，越中では杉谷4号墓で主体部上土器配置が行われている。白江式期以前では配置される土器群は在地の土器を中心に各種の高杯，器台，器台に乗る中・小形の壺類などが量的に多く，それに大形の壺が少数伴うというものである。小羽山墳墓群や原目山墳墓群（第3図）の豊富な土器群のセットは山陰や吉備の弥生墳丘墓の土器群のそれと共通するものがあり，多量配置を行わないところでも，いくつかの器種は欠落するものの高杯・器台中心の器種構成は基本的に変わらない。ところが，白江式期になると明らかにそれまでと異なる器種構成が見られる。小菅波4号墓が典型例で，壺中心の器種構成に変化している（第4図）。畿内系加飾壺や北陸型二重口縁壺[6]などこれまで北陸で見られなかった土器が出現していることは，当古墳が前方後方墳であることと無関係ではないと思われる。また，白江式期以降は北陸の土器様式に東海系土器群の影響が強く見られ，墳墓出土土器群も例外なく様式的に変化している。

古府クルビ式期では能登の宿東山1号墳，国分岩屋山4・5・6号墳，国分尼塚1号墳にお



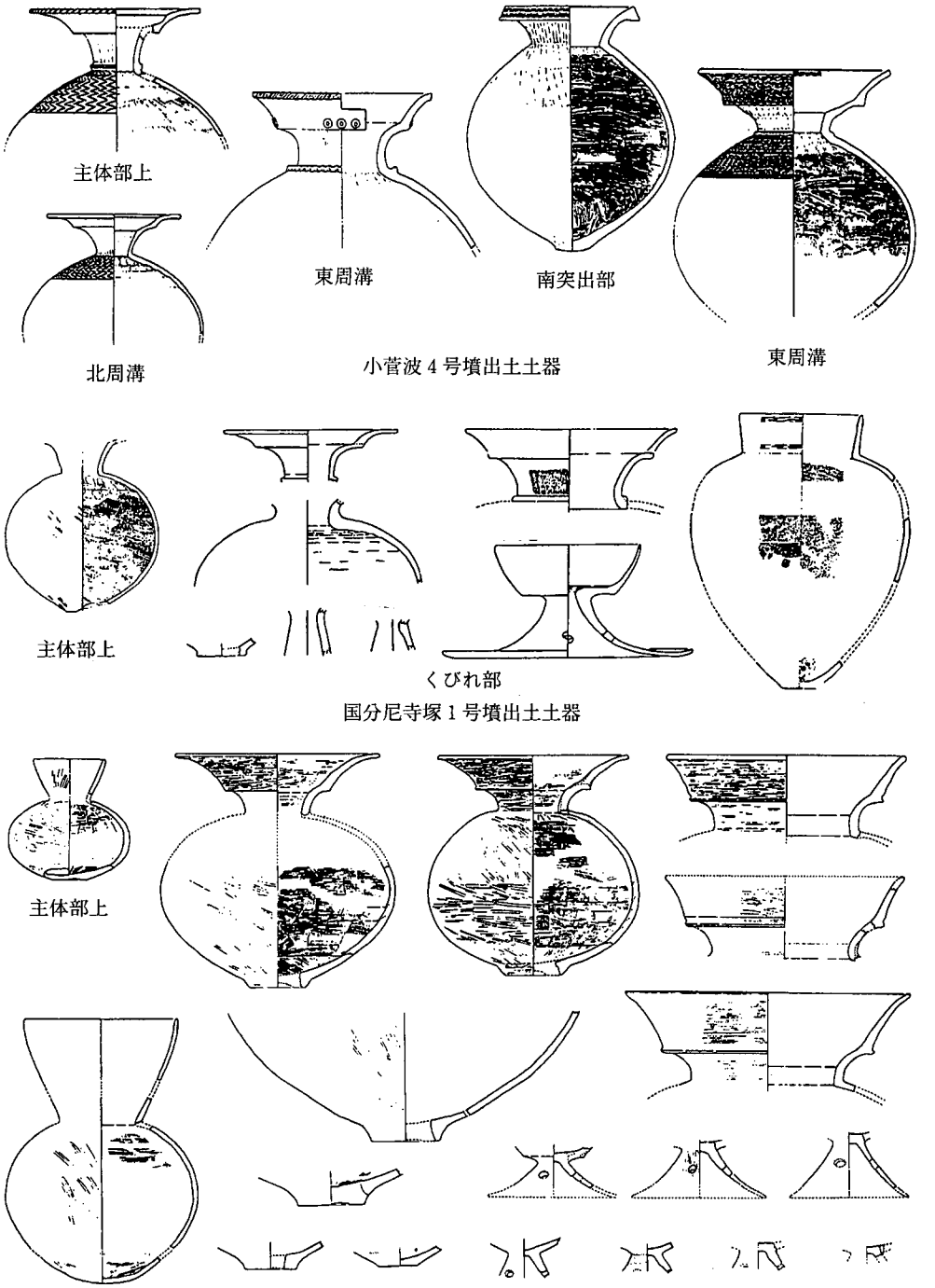
王山３号墓周溝出土土器



原目山Ⅰ号墓主体部上出土土器

第３図　北陸における法仏～月影式期の墳墓出土土器の構成（S＝1/8）

いて主体部上土器配置が行われている。このうち宿東山１号墳，国分尼塚１号墳において主体部上からは壺１個体のみの出土である。この器種構成は注目する必要がある。それは越中の谷内16号墓では墓壙から少し離れた墳頂平坦面上に壺１個体が置かれているし，国分岩屋山４号墳では壺と蓋が１個体ずつ出土しているのみなので，これをセットとみなせば同様の器種構成と考えてもよいだろうと思われる。この壺１個体という特殊な器種構成の最古例は今のところ月影式期の七ツ塚１号台状墓墳丘下のC-3土壙墓にみられ，また，白江式期の小菅波４号墳も主体部上に置かれていたのは壺１個体である。まだ類例が少ないものの他地域にはほとんど見られないものであるため，その特殊性を積極的に評価して類型化し，前々稿ではこのような器種構成を採る主体部上集中配置を「北陸型」とした。



第４図　北陸における白江～古府クルビ式期の墳墓出土土器の構成（S＝1/8）

なお，高畠式期に至っても三尾野2号墳などで主体部上に土器を置いており，散発的ではあるが，その後も連綿と続くものと考えられる。

Ⅲ－2　墳頂集中配置（A3類型）・墳丘出土土器（B1・B3類型）およびその器種構成

弥生後期～古墳前期の墳墓において主体部上から土器が出土する例は全体の比率からいえば多くはなく，むしろほとんどの墳墓では墳丘の各所から明確な集積の跡もなく，ただ漫然と出土する場合が多い。多くの場合では墳丘斜面から墳裾あるいは周溝にかけて出土することが多く，調査者は墳頂で使用された土器が転落したものと解釈する場合が多い。そして，その土器量はかなりの数に上ることも珍しくないのである。

墳墓において行われたであろう葬送祭祀儀礼の中でこれらがどのような役割を果たしたかは定かではないが，墳墓周辺から出土することから，儀礼に使用されたことは確実であろうし，その意味において主体部上出土土器と並んで葬送祭祀儀礼を復原するための資料として重要なものであるが[7]，土器が二次的な移動をこうむっているために配置段階の状態を復原することは困難である。とくに小規模な墳墓の場合，墳頂平坦面の遺存状況が悪く，墳頂から墳丘各所に移動する際のプロセスは復原困難な場合が多い。ところが，古府クルビ式期になり墳丘が大形化すると築造時の墳頂平坦面の遺存状況がよくなり，主体部上以外の平坦面出土土器の様相が把握できる例がでてくる。宿東山1号墳や国分尼塚1号墳がその例で，墳頂の一隅に土器をかたづけた跡があるという（A3）。いずれも細片化した資料のせいか図示されていないが，破砕行為が行われたかどうかはともかくとして，一度土器が集積された場所であることはまちがいないようだ。宿東山1号墳では後円部墳丘斜面の片側にそれらの土器群が一括投棄されたと考えられ，国分尼塚1号墳では両くびれ部に多くの土器が分布している。どちらもそれらのセットを具備する土器群は主体部上に置かず周辺に投棄し，主体部上にはただ壺1個体を配置していることが共通する。

Ⅲ－3　墓壙内配置（D類型）について

墓壙内に土器を置く例は各時期とも散発的にみとめられる。副葬品として少数の土器を墓壙内におさめる行為はいつの時代にも見られるが，古墳時代前期に至ると朱の容器として土器がおさめられるようになる。本稿ではこれらの例については未整理なこともあって言及しないが，ここで問題としたいのは丹後地方に起源をもとめられる「墓壙内破砕土器供献」である。北陸における類例は非常に少ないが小羽山36号墓で行われており，古川登によって丹後からの婚入者が想定されている（古川1997）。また，袖高林1号墓も墓壙内破砕土器供献が行われているが主体部内の土器と墳丘外に集積された土器群中の破片が接合したことは大きな意義がある。つまり，儀礼に使用された土器群のうち破砕した破片の一部を墓壙内に配置し，他は墳丘外に

集積しているということになる。

Ⅲ－4　囲繞配列（C類型）と埴輪について

現在のところ北陸では古府クルビ式期までに築造された墳墓で確実に囲繞配列を行った例は無い。また，高畠式期においても円筒埴輪の受容が非常に限定されることに関係するのか，壺による囲繞配列も非常に少ない。古府クルビ式期の宿東山1号墳からは墳丘斜面に多くの土器が投棄されていたが，底部穿孔二重口縁壺が少なくとも6個体以上あることから，投棄する前に一時的にせよ囲繞配列を行った可能性はあると考えられる。また，高畠式期の関野1号墳においても規格的な造りの底部穿孔二重口縁壺が複数個体出土することから，囲繞配列を想定してもよいかもしれない。高畠式期以降，北陸においても粘土槨を内蔵する畿内的な大形古墳が出現するが，越前の六呂瀬山1号墳・手繰ヶ城山古墳などで埴輪を受容しているが，他のほとんどの大形古墳では埴輪を使用していない。このことは北陸の大きな特徴といえるだろう。

Ⅲ－5　主体部上土器群に伴う礫群および標石について

主体部上に礫が伴う例は王山4号墓（猫橋式），片山鳥越5号墓（法仏式新），王山3号墓（法仏新），杉谷4号墓（白江式）にみられる。たいていの場合は土器群より下層に礫群が分布するようだ。また，河原石・角礫・石杵などを土器群の中央に置き，標石とする例は小羽山30号墓（法仏式古）・原目山Ⅱ号墓（月影式）においてみられる。

これらの石を主体部上に置く例については大谷晃二が集成している（大谷1995）。それによると山陰や瀬戸内地域の弥生後期後葉～庄内式併行期の墳丘墓において主体部上に礫を積み上げたり，標石を置く例がかなりあるという。主体部上に礫を積み上げる例は楯築墳丘墓第1主体（弥生後期後葉），西条52号墓（庄内式併行期前半），矢藤治山墳丘墓円丘部主体（庄内式併行期後半）などで，積み上げるほどではないが礫群を置く例では佐田谷1号墓SK 01（弥生後期前葉），黒宮大塚墳丘墓（弥生後期後葉），矢谷MD 1号墓第5主体（庄内式併行期前半）など，瀬戸内地域の首長墓の中心主体に多く見られる。一方，土器とともに河原石や石杵などの標石を置く例は，西谷3号墓（弥生後期後葉），桂見1・2号墓（庄内式併行期後半），安養寺1号墓（古墳時代前期古相），みそのお土壙墓群（庄内式併行期）など山陰の首長墓および瀬戸内の土壙墓群などにみられる。北陸における主体部上における礫群・標石の例は，こうした瀬戸内・山陰における葬送儀礼の一行為が東方に伝播した結果行われたものと考えられる。

Ⅲ－6　土器に対する破砕・打ち欠き・穿孔について

遺跡から出土した土器について破砕行為を証明することは非常に難しいことである。比較的移動の少ない主体部上土器群でさえ木棺の腐朽にともなう陥没による移動があり，さらに墳頂

平坦面表土の流出によって上方に分布していた土器が失われることもあるだろう。土器が細片化している状態をもって破砕とする向きもあるが，これらの移動や土圧によってそうなる場合も多いようだ。そうしたなかで比較的破砕の可能性の高いものとしては，①不自然な割れ口を持つもの（打ち欠きの跡など），②複数個体の土器が存在するにもかかわらず，どれも決まったパーツが欠落するもの，③主体部など密閉された空間に意識的に配置された破片と，その外部の破片が接合したとき，などのケースが考えられる。このうち②については片山鳥越5号墓の主体部上土器について言える。第1主体部上から高杯が数個体出土しているが，脚裾部・杯部の破片は比較的多いのに比べて脚柱部の破片がほとんど欠落しているため，土器が破壊された後に部位を選んで埋置している可能性がある[8]。また，③については前述したとおり袖高林1号墓の例に見ることができる。墓壙内から出土した土器片が意識的なものだとすれば，破砕行為を証明したことになるだろう。

さまざまな器種のうち壺形土器は打ち欠き・穿孔される率が一般的に高い。どのような理由でそうされるのかはいまだ解明されていないが，弥生時代から古墳時代の前期にかけておおよそ打ち欠き→焼成後穿孔→焼成前穿孔という流れで変化していき，また弥生時代では土器の胴部にも開けられた（田中 1988）が，古墳時代ではほぼ底部穿孔が一般的である。北陸では古府クルビ式期以降の古墳から出土する壺に打ち欠き・穿孔が施されている。国分尼塚1号墳の主体部上から出土した二重口縁壺は口縁部と底部が打ち欠かれていた。また，宿東山1号墳の主体部上から出土した直口壺は胴部下半に打ち欠きによる穿孔があり，墳丘下に転落していた規格的なつくりの二重口縁壺群の底部はすべて焼成後穿孔が行われている。通常，この時期の古墳から出土する壺は焼成前穿孔がすでに一般的であるので，北陸では古い慣習が新しい時期まで残されているといえよう。ちなみに高畠式期の関野1号墳の二重口縁壺は焼成前穿孔となっている。

Ⅳ　他の要素の検討

本章では北陸の墳墓の土器配置以外の要素について補足的に検討する。

まず，墳形についてだが弥生時代後期初頭から小規模な方形墓が営まれる（第2表）。方形の墳墓はその後白江式期に至るまで中・小規模墳の主流になる。一方，四隅突出型墳丘墓は法仏式期古段階にまず越前の小羽山墳墓群に造営される。山陰では九重式に併行する時期である。その後，北陸の首長墓の墳形に四隅突出形が採用されるようになり，越中でも法仏新段階で千坊山遺跡群にて造営が始まる。しかし，越前での造営は長く続かず，月影新段階の首長墓とされる乃木山墳丘墓では長方形を採用している。加賀では月影式期の資料が一塚墳墓群で発見されたのみだが，越中は千坊山遺跡群において法仏新段階から白江式期にいたるまで連綿と四隅突出形を首長墓の墳形に採用しつづけた。北陸の四隅突出型墳丘墓は貼石・列石が欠落する点

第2表　北陸の墳墓編年と土器配置の様相

		越前		加賀		能登		越中
弥生時代後期	猫橋		王山1号 ■11 B3 王山4号 ■12 A1礫 B3 D1					
	法仏古	小羽山30号 ⌘33 A1標石	小羽山17号 ■A1					
	法仏新	小羽山26号 ⌘34 A1標石 南春日山 ■48 ?	片山鳥越5号 ■16.5 A2礫 西山1号 ■13 A1 D1					富崎3号墓 ⌘22+ ?
庄内式併行期	月影	原目山I号 ■25 A1 乃木山 ■34 ?	原目山II号 ■30 A1標石 袖高林1号 ■10.4 B3 D2	七野1号 ■20 ? 一塚21号 ⌘27 ?	七ツ塚墳墓群 ■ A1			六治古塚 ⌘24.5+ A1 鏡坂1号 ⌘24.1+ ?
古墳時代前期前半	白江	風巻神山4号 ■16 ?	中角SX 1 ▮21 ?	小菅波4号 ▮16.6 A	一塚SX 04 ▮27 ? 戸水C ST 16 ▮20.7	大槻11号 ▮27.7 ?		富崎2号 ⌘17+ ? 杉谷4号 ⌘47 A1礫
	古府クルビ	花野谷1号 ●23 ? 安保山1号 ●31.8 D1	西山3号 ●12 D1	分校カン山 ●36.7 ?	宇気塚越1号 ▮19 ?	宿東山1号 ●21.4 A1 A3 B3 国分尼塚1号 ▮52.5 A1 A3 B1	国分岩屋山4号 ■14.6 A1 国分岩屋山6号 ■11 A1 A3	勅使塚 ▮66 ? 谷内16号 ●47.7 A3
	高畠		三尾野2号 ■14.6 A1			雨宮1号 ▮64 B3?		関野1号 ●65 C2?

で山陰のそれと明確に区別されるが，越中の資料は方台部が正方形を呈することで，それ以西の方台部が長方形を呈する四隅突出型墳丘墓と区別できよう。

白江式期になると北陸各地に前方後方形の墳墓が登場してくる。白江式期の前方後方形の墳墓は極めて小規模であり，同時期の四隅突出型墳丘墓の規模を上回るものは無い。また，一塚墳墓群や千坊山遺跡群では首長墓の系譜が四隅突出型墳丘墓から前方後方形墳墓にスムーズに移行しているようであり，両者が対抗するような図式は描けない。白江式期を境にして以後，四隅突出型墳丘墓は造営されなくなり，かわりに前方後方形や前方後円形が首長墓の墳形として採用されるようになったが，そのことに大きな首長系列の変革は伴わず，あくまでも墓制のみの変容として捉えるべきであろう。

古府クルビ式期には前方後円形の墳墓が登場してくるが，あまり大規模なものは見当たらない。越前では前方後円形が卓越するようだが，加賀・能登では前方後方形が多いといえる。越中では地域によって前方後円形を採用するところと前方後方形を採用するところが分かれるよ

うだ。高畠式期には大形の墳丘を持つ古墳が営まれ始めるが，やはり越中では六呂瀬山1号墳や手繰ヶ城山古墳など大形古墳は不整形ではあるが前方後円形であり，加賀・能登では両者が同居する。加賀の秋常山古墳群では巨大前方後円墳である1号墳の隣に前方後方形である2号墳が，能登の雨宮古墳群ではほぼ同規模の前方後方墳（1号墳）と前方後円墳（2号墳）が築かれている。また，大形円墳である小田中親王塚古墳の隣に前方後方墳の小田中亀塚古墳が築かれている。円形原理と方形原理が安定的に同居している状態といえよう。

墳形だけの検討では順次漸移的に墓制が変化しているように見えるが，他の要素も加えるとどうだろうか。内部主体が調査された主な墳墓および古墳時代前期後半の大形墳を第3表にま

第3表　北陸の墳墓要素表

墳墓名	時期	墳形	全長	主丘規模	葺石・埴輪	墓壙規模	槨	棺
	副葬品							
小羽山30号	法仏古	四隅突出	33×28	26×22	なし	5.3×3.0	なし	箱形木棺
	碧玉製管玉103・ガラス製管玉10・ガラス製勾玉1							
小羽山26号	法仏新	四隅突出	32×34		なし	6.5×	なし	箱形木棺
	碧玉製管玉1							
原目山1号	月影	方	25×20	25×20	なし	4×2.5	なし	箱形木棺
	碧玉製管玉323・ガラス小玉728・鉄刀1・鉄短刀1・鉄片1							
乃木山	月影	長方	34×24	34×24	なし	7.1×4.4	木槨	箱形木棺
	鉄刀1・素環頭鉄剣1・木製枕1							
七野1号	月影	方	20	20	なし	4.2	なし	箱形木棺
	碧玉製管玉29・素環頭刀子1							
風巻神山4号	白江	方	16	16	なし	7.0×6.1	なし	舟形木棺
	神人龍虎画像鏡1・管玉31・刃器状鉄製品							
小菅波4号	白江	前方後方	16.6	13.6×12	なし	(3.6×1.4)	なし	箱形木棺
	ガラス小玉5・鉇1・鉄片1							
花野谷1号	古府クルビ	造出付円	23	18	なし	3.5×1.0	なし	割竹形木棺
	三角縁獣文帯四神四獣鏡1・連弧文銘帯鏡1・勾玉1・管玉24・ガラス小玉約150・漆製品・鉄剣4・鉄鏃3・刀子1							
分校カン山1号	古府クルビ	前方後円	(36.7)	(24.5)	なし	不明	不明	不明
	方格規矩四神鏡1・管玉7・鎗先1・鉄斧1・鉇1							
宿東山1号	古府クルビ	前方後円	21.4	15.8	なし	3.8×2.4	なし	箱形木棺
	方格規矩四神鏡1							
国分尼塚1号	古府クルビ	前方後方	52.5	28	なし	11×6.3	木槨？	割竹形木棺
	棺内：夔鳳鏡1・勾玉1・管玉10・鉄刀1・鉄短剣3・鉄短刀1・鉄槍1・鞆1（銅鏃57）・鉄鏃4・鉄斧3・鉄鑿3・鉇2・鉄鍬先1・箭5以上，棺外：鉄槍1・黒漆塗り小品							
谷内16号	古府クルビ	前方後円	47.6	23	なし	5.45×0.83	なし	割竹形木棺？
	鉄剣1・鍬先1・鉇1							
関野1号	高畠	前方後円	(65)	(34)	なし	不明	粘土槨？	不明
	大刀1・銅鏃20＋α							
柳田布尾山	高畠	前方後方	107.5	54	なし	不明	粘土槨	不明
雨宮1号	高畠	前方後方	64	43.6	葺石	8.6×4.5	粘土槨	割竹形木棺
	倣製鏡1・車輪石4・石釧15・小形琴柱形石製品1・管玉14・大刀7・短剣7・銅鏃約30・方形革綴短甲1・漆塗盾1・袋状鉄斧1							
小田中親王塚	高畠	円	60	60	葺石	未調査	竪穴式石室？	未調査
秋常山1号	高畠	前方後円	140	110	葺石	未調査	未調査	未調査
手繰ヶ城山	高畠	前方後円	128.4	78	葺石・埴輪	未調査	未調査	未調査
六呂瀬山1号	高畠	前方後円	140	78	葺石・埴輪	未調査	未調査	未調査

とめた。月影式期以前の墳墓は墓壙に箱形木棺をおさめ，副葬品は玉類と鉄製武器類・鉄製工具類に限定されているが，一見してわかるとおり白江式期の前方後方形墳墓の出現とともに副葬品目に中国鏡が加わり，若干遅れて割竹形木棺の採用がはじまることがわかる。また，高畠式期以降に粘土槨が採用され，葺石を持つ大形古墳が出現してくる。つまり，北陸の弥生後期から古墳前期の首長墓はその内容から三群に分けることができ，第二群の開始は白江式期に，第三群の開始は高畠式期に求めることができる。そのばあい前方後方形墳墓の出現は第二群の開始の指標となり得るが，前方後円形墳墓の出現は必ずしも新しい画期のはじまりの指標とはならない。また，埴輪についても前期後半に越前に受容されるのみで，これも北陸においては画期の指標とはなり得ない。

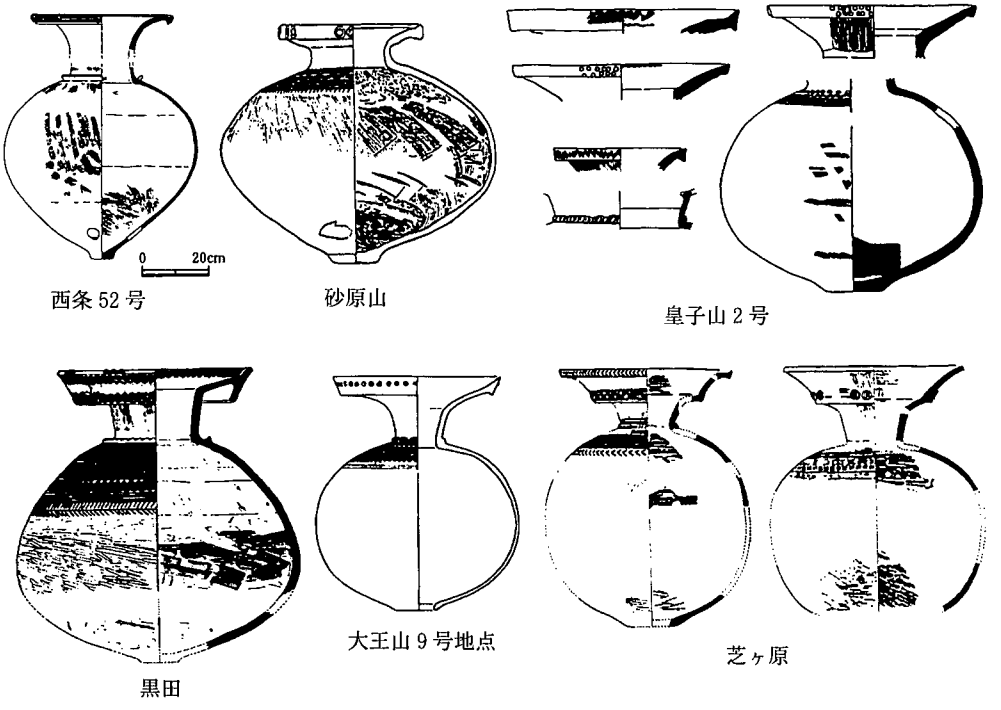
以上，墳形・外表施設・埋葬施設・副葬品について検討を行い画期を設定したが，前章で検討した土器配置との関係はどうであろうか。弥生後期以来の高杯・器台を中心とする器種構成を持つ土器群は次第に器種・個体数を減らす。猫橋－法仏－月影と続いた北陸独自の土器様式が白江式期に至り東海系土器の流入を受けて崩壊すると，墳墓祭祀に使用される土器のセットも東海系の高杯・小型器台に二重口縁壺を伴う土器群へと変化する。この変化は先の画期の第二群の開始に対応するものである。この段階の高杯・小型器台は量的に少なく，また壺類は仮器化されるようになるので，儀礼自体が形式化したものに変容しつつあったと推測できる。なお，高畠式期にはじまる第三群の開始に対応する画期については，他地域であれば囲繞配列の浸透という現象があてはまるのであるが，北陸では越前を除きそれがあまり見えてこないことは前述したとおりである。

V　周辺地域の検討とまとめ

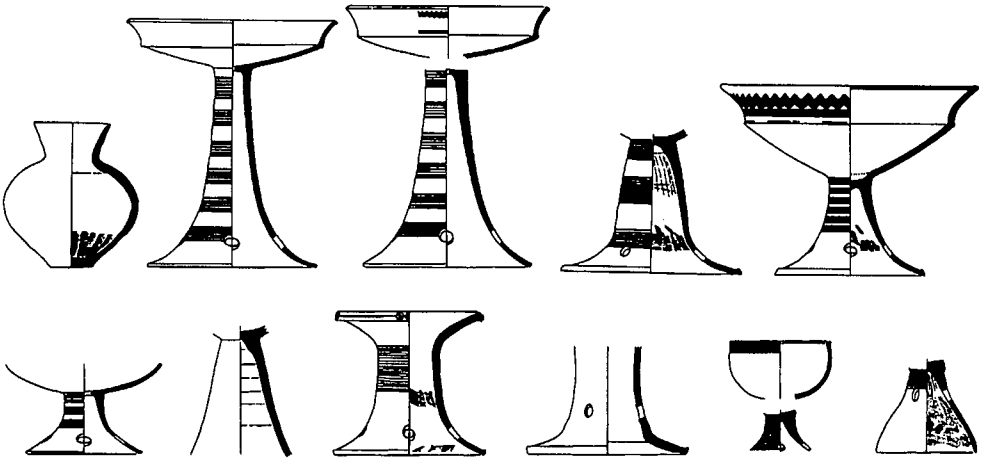
さて，これまで弥生・古墳両時代の東西の墓制の系譜関係を整理すべく，北陸の墳墓について検討を行ってきた。次に周辺地域の墳墓とのかかわりを展望的に述べてまとめとしたい。

北陸は東日本の中では唯一弥生後期中葉という早い時期から大形の墳丘墓が安定的に築造されつづけた地域である。それは日本海を介して山陰地方との結びつきが強かったためか，四隅突出型墳丘墓の存在，高杯・器台を中心とする土器群による儀礼，主体部上の礫群・標石，木槨の存在など，その内容は山陰・瀬戸内地域で盛行した典型的な後期弥生墓制と共通するものであり，そうした墓制の分布圏の東端として捉えて差し支えないと考える。

では，法仏－月影式期に相当する時期の周辺地域はどのような状況なのだろうか。後期後葉段階において安定的に墳丘墓あるいは台状墓を造営している地域は吉備・四国北東部・山陰・近畿北部（丹後・北丹波・但馬）であるが，それらの地域と摂津・河内・大和との間の地域では庄内式併行期に加飾壺を使用する儀礼を行ったと思われる墳墓がつくられる。弥生後期後葉～庄内式前半段階（月影式併行期）では西条52号墓（播磨）・砂原山墳丘墓（山城）・皇子山2



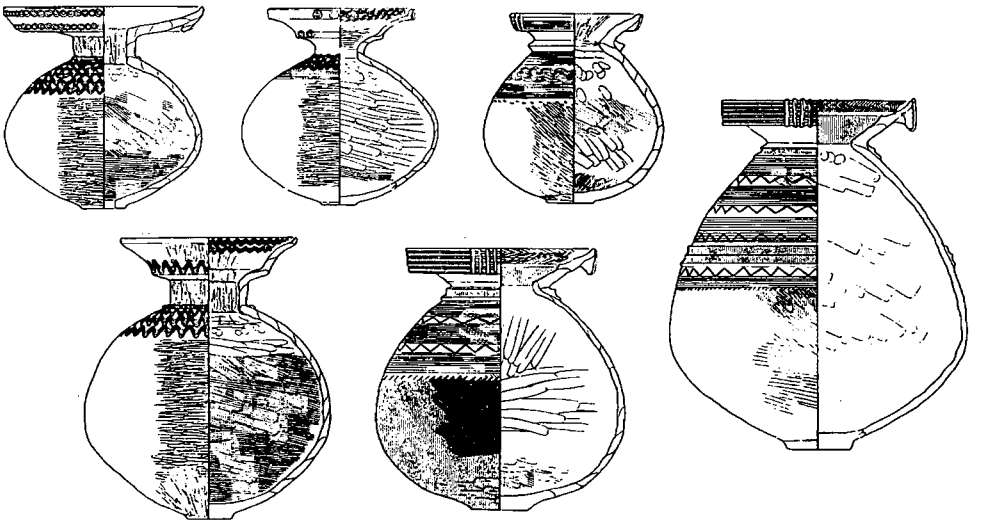
第5図　弥生後期後葉～庄内式併行期の墳墓出土加飾壺（S＝1/8　西条52号を除く）



第6図　高松弥生墳丘墓主体部上出土土器（S＝1/8）

号墓（近江）などがあり，また庄内式後半段階（白江式併行期）では芝ヶ原12号墓（山城）・黒田古墳（南丹波）・小松古墳（近江）・大王山9号地点（大和宇陀）などがある（第5図）。北陸では小菅波4号墓がこれらの動きに呼応するものと考えられよう。

では，以上の地域と中部高地・関東との接点となる地域，すなわち伊勢・美濃・尾張はどうだろうか。実は伊勢・美濃には後期後葉段階で丘陵上に墳丘を営み，そこで土器を使用した儀

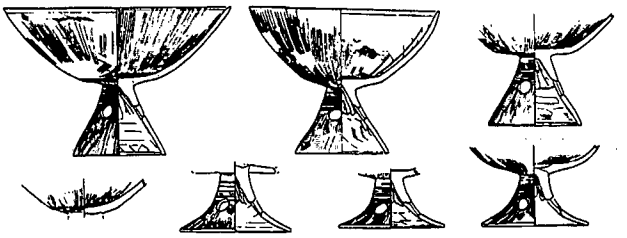


第7図　西上免 SZ 01 周溝出土装飾壺（S＝1/8）

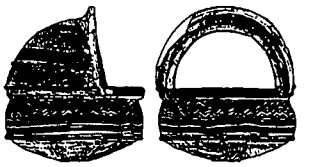
礼を行う墳墓がすでに出現している。三重県津市高松墳丘墓（谷本 1970）は山中Ⅰ式（赤塚 1992 b・2003）に位置付けられる 10×6 mの楕円形墳で，墳頂に営まれた 2 基の墓壙から多くの弥生土器が出土している。高杯中心の器種構成で西日本の弥生墳丘墓の土器祭祀と系譜を一にするものであろう（第 6 図）。岐阜市端龍寺山山頂墳（荻野 1985・赤塚 1992a）は，山頂において岩盤を掘り抜いた墓壙が 2 基検出され，そのうちのひとつから長宜子孫銘雷雲文連弧文鏡が出土したことで著名であるが，山中Ⅰ式の土器が伴っている。高杯と鉢で構成されている。岐阜県各務原市加佐美山墳丘墓（渡辺 1990）は 15 m 以上の方丘墓である。主体部は未確認であるが，墳丘東側に付設された竪穴状遺構の床面直上から儀礼に使用されたと考えられる土器群が出土した。高杯・甕・鉢などから構成され，山中Ⅱ式に位置付けられる。さて，こうした伊勢・美濃における後期後葉の山上墓と庄内式併行期に至ってから平野部に営まれる西上免 SZ 01などの前方後方形墓との系譜関係ははっきりしないが，西上免 SZ 01では畿内系加飾壺やパレススタイル壺などが多く出土しており，前述の庄内式併行期になってから現れる壺形土器中心の土器構成へと変化しているといえよう（第 7 図）。

それでは東海以東の東日本ではどうだろうか。この地域の廻間Ⅰ～Ⅱ式併行期に位置付けられ，土器配置が判明している墳丘墓（あるいは古墳）には北平 1 号（信濃），弘法山（信濃），秋葉山 3 号（相模），高部 32・30 号（上総），神門 5・4 号（上総）などが挙げられる。箱清水系の土器を使用している北平 1 号を除く他の墳墓では，畿内系加飾壺や廻間様式に起源が求められる高杯，手焙形土器などが主要器種となっているが，このような器種構成を持つ土器群の起源を北陸に求めることはできない（第 8 図）。

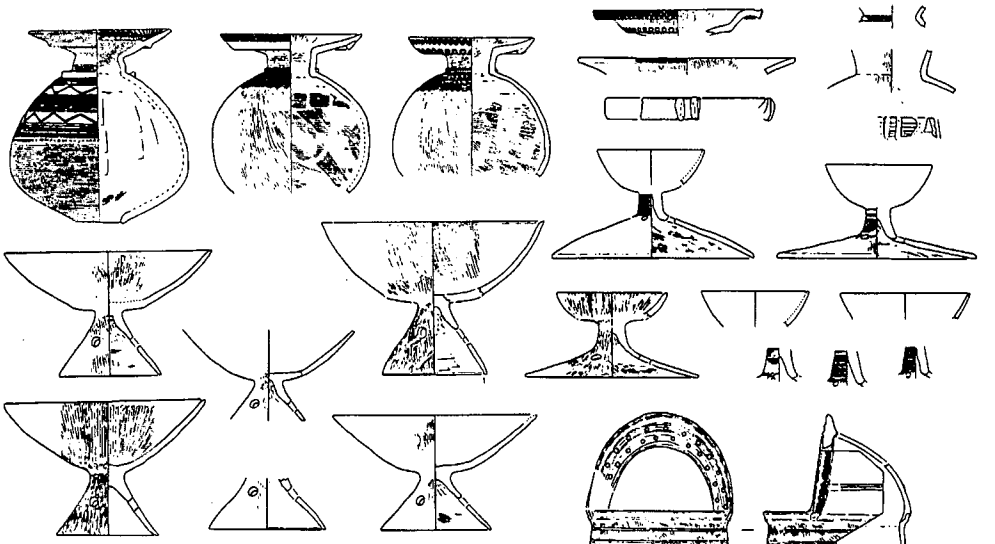
今回の北陸の土器配置を整理した成果から，初期の東海・北陸以東の東日本の土器配置の系



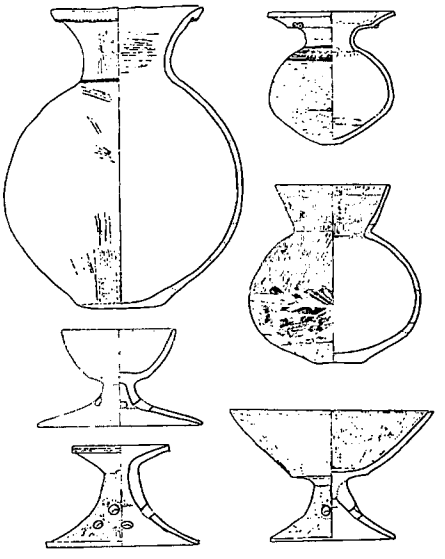
高部 32 号墓主体部上出土土器



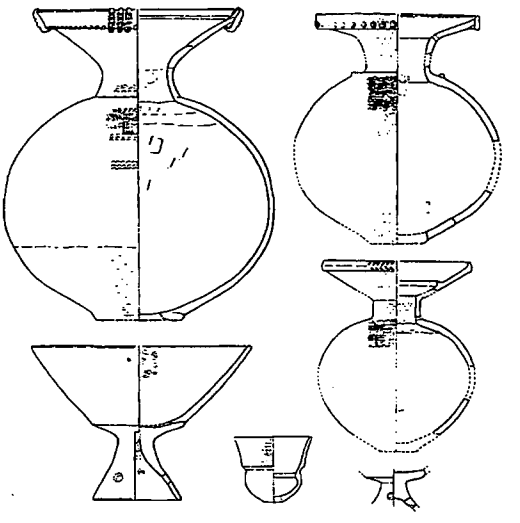
高部 30 号墓
主体部上出土土器



弘法山古墳主体部上出土土器

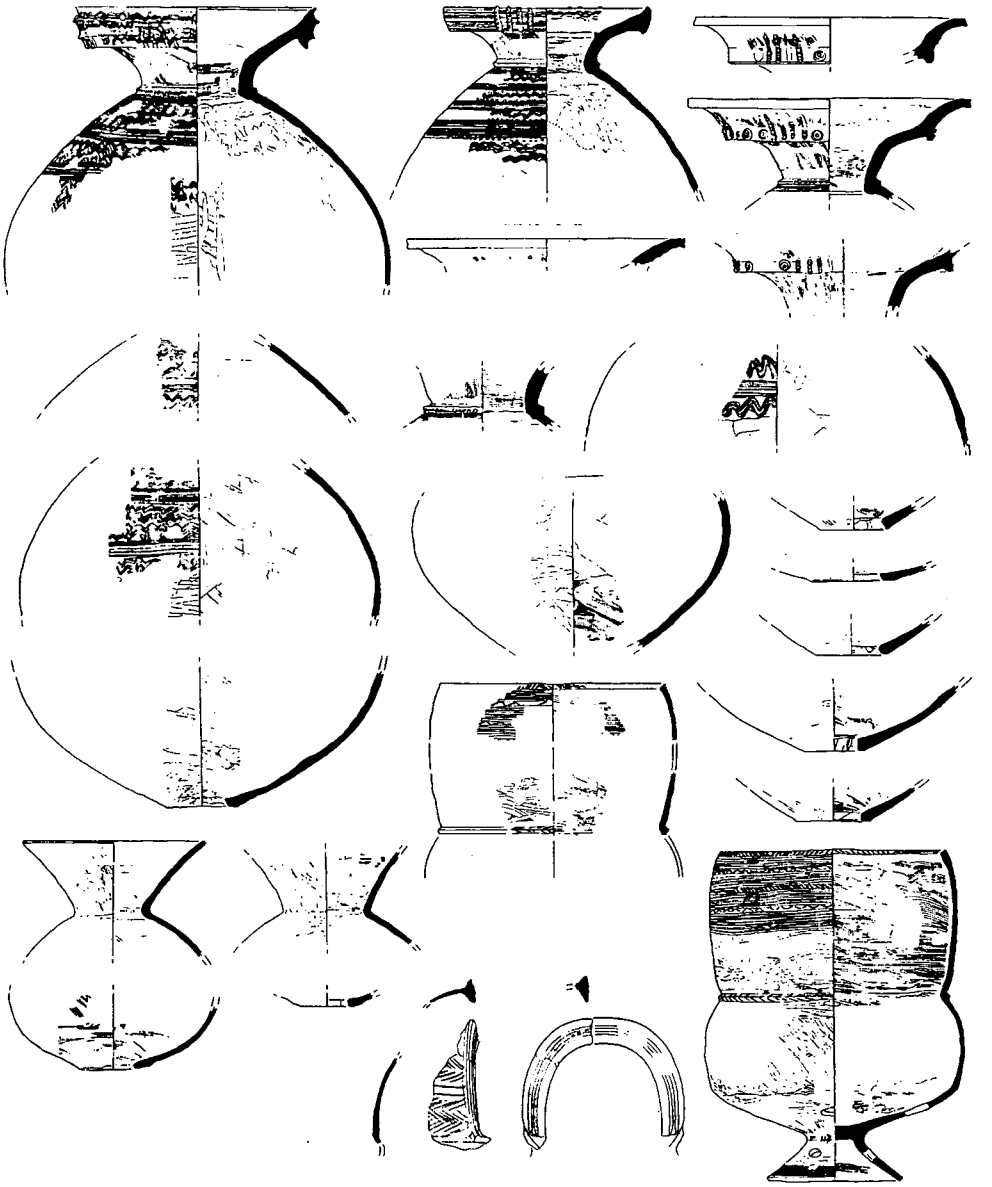


神門 4 号墓主体部上出土土器



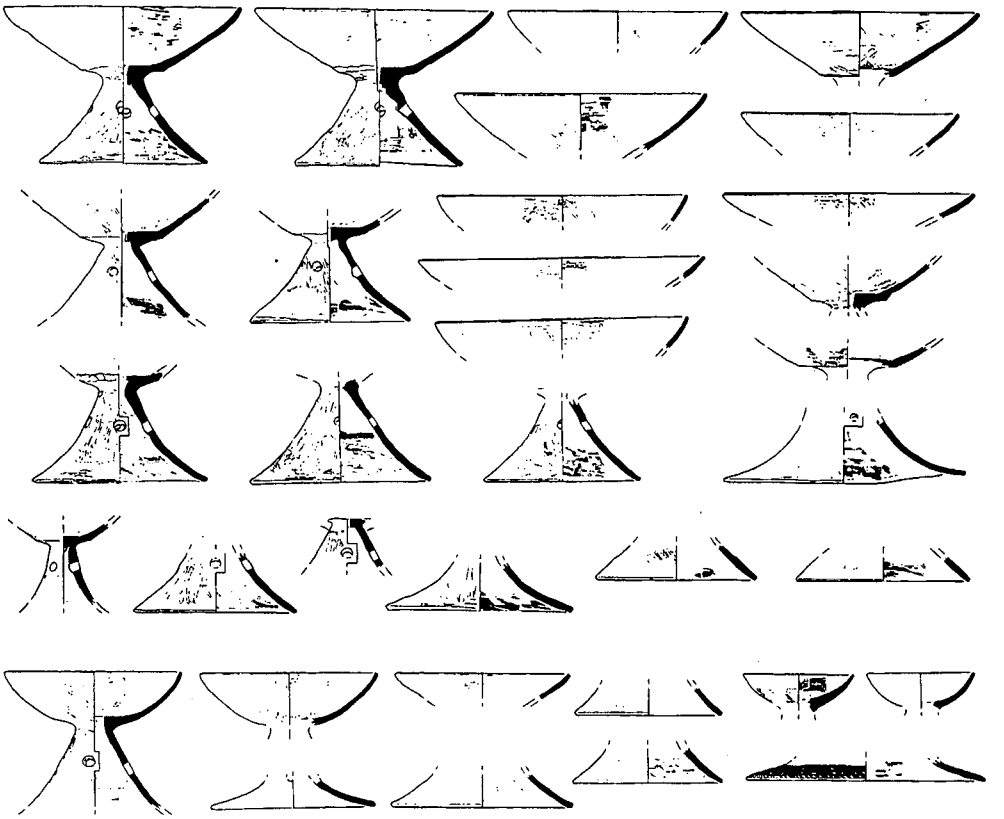
神門 5 号墓主体部上出土土器

第 8 図　東日本の廻間Ⅰ～Ⅱ式併行期の墳墓出土土器の構成（S＝1/8）



第9図　小松古墳土壙A出土土器の構成1（S＝1/8）

譜は北陸には直接求めることはできないと結論付けられる。白江式期になって外来の土器配置の影響をうけて弥生時代的な器種構成が変容するが，その後，北陸型二重口縁壺や壺1個体の配置など北陸独自の土器配置は東日本の他の地域に影響を与えることは無かった[9]。一方，神門・高部・弘法山などの墳墓に見られる祭祀の起源が廻間様式土器分布圏に求められるかというと，今のところ確実な資料がなく決定力に欠けるのが現状であろう。これらの東日本の初期の土器配置にもっとも近いのは滋賀県伊香郡高月町小保利古墳群中の小松古墳（黒坂ほか2001）であろうか。加飾壺・高杯・手焙形土器が墳頂に掘り込まれた土壙Aから一括して出



第10図　小松古墳土壙A出土土器の構成2（S＝1/8）

土している（第9・10図）。

北陸は白江式期になって関東などの東海以東の地域とともに影響を与えられた側であり，その新しい儀礼の源流は，主体部上という配置位置などを考慮すれば弥生時代後期の山陰・瀬戸内で行われた儀礼に求められるが，直接的な影響を受けたのは山城・近江・伊勢・東海西部などの地域であったと考える。今後この問題を考える上で加飾壺・手焙形土器・元屋敷系の高杯などの動向を追うことが重要であろうし，播磨・丹波・宇陀・伊勢・山城・近江・美濃・尾張などの地域における主体部上土器群の類例の増加について注視する必要があるだろう。

おわりに

今回の作業を通じて，単に土器様式の問題ではなく，墳墓における祭祀という観点から改めて北陸の地域性を述べることができたと思う。また，北陸墓制の西日本的な様相から東日本的な様相へ変化する様子も不充分ながら描き出せたと考えている。しかし，本稿の目的である東西の墳墓における土器を使用した儀礼の系譜整理という点では目的を果たすことができなかった。それは北陸・東海両地方以東の儀礼の源流が上記の間の地域に存在するようではあるが，

現状では資料不足で追求困難なためである。今後，小松古墳のような資料の増加が望まれる。

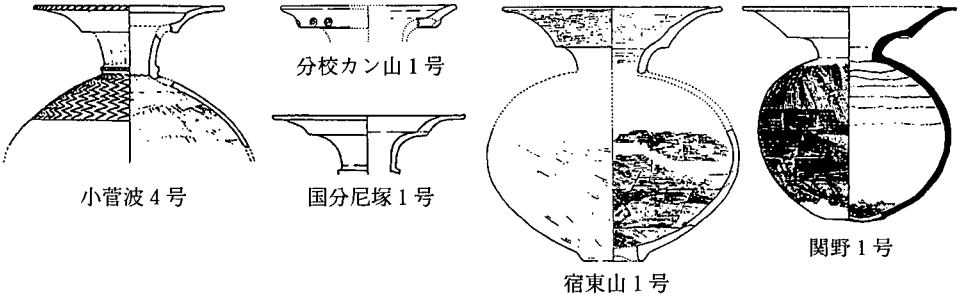
塩谷修は 1990 年の論考で関東地方の前期古墳の主体部上土器配置の源流を吉備・山陰にもとめ，東海西部地方が媒介になったという卓見を示した（塩谷 1990）。筆者も同様の予想を漠然と持ちつつも，東海西部よりもう少し広げた形で「間の地域＝媒介地」を想定し，今回はその中でも資料的に充実した北陸の資料を中心に扱った。が，しかし塩谷が執筆した当時と比較にならない程細かい土器編年網と墳墓の新資料を与えられながらも，塩谷の予想の枠を 1 歩も出ることはなかった。力不足を自戒しつつ今後もさらにこの問題について取り組んでいきたいと思う。

謝　辞

本稿は卒業論文・修士論文の延長上にある研究で，引き続き小林三郎先生にご指導いただいた。本稿を草するにあたり，古川登氏・堀大介氏・御嶽貞義氏・清水町教育委員会・婦中町教育委員会には資料収集・情報提供などで格別な御恩情を賜った。また，今回の執筆の機会は石川日出志先生にいただいた。末筆ながら記して感謝の標としたい。

註

1) 東日本については（古屋 1998）で，西日本については（古屋 2002b）でまとめている。本稿では前者を「前々稿」，後者を「前稿」と呼ぶ。
2) 北陸の古墳出現期の墳墓の様相についてはすでに古川登氏が土器配置の様相も含めてまとめておられる（古川 2003b）。本稿の主張のなかに古川氏の主張と重複するものが多々あるが，そのプライオリティは当然のことながら古川氏に属するものであることをはじめにお断りしておきたい。
3) 前稿では北陸における古府クルビ式期前半段階（漆町 7 群期）を畿内の布留 0 式期，東海西部の廻間Ⅱ式後半期に併行させて考えていたが，本稿では堀大介の併行関係に従い漆町 7 群期の開始を布留 1 式および廻間Ⅲ式の開始期と併行させた。
4) 「墓壙内破砕土器供献」とは木棺の蓋のレベルまで棺周囲を埋めた段階で，その埋土の上面から棺上にかけて破砕した土器を置く行為が想定されるものである（肥後 1994a・b）。
5) 突出部の付け根に掘り込まれた土坑上面から土器が出土している。調査者はこれを土壙墓の可能性があるとしている。
6) 北陸の二重口縁壺の特徴として頸部下端が細く，上方に大きく外反して開く。型式変化は他地域の二重口縁壺と異なり，小菅波 4 号→国分尼塚 1 号→宿東山 1 号→関野 1 号と次第に頸部高が低くなる。



7)　儀礼挙行後に，主体部上に土器を置く場合と周囲に廃棄する場合とにいかなる意識の違いがあるのかを究明することは非常に困難であろう。この分析のためには主体部上が撹乱されていない墳墓において土器を置かない例を集成する必要がある。

8)　片山鳥越5号墓主体部上土器については清水町教育委員会の古川登氏の計らいで整理中の土器を実見させていただいた。

9)　前々稿において中山36号墳の土器配置をA1とし，壺1個体を主体部上に置いているとしてこれを「北陸型」主体部上土器配置に含めたが，これは筆者の誤認で実際はD1である。事実と異なる分類をし，ご迷惑をおかけしたことをここでお詫びしたい。東日本で壺1個体を主体部上に配置する例は千葉県佐倉市飯合作1号墳が挙げられるが，これを北陸の影響として捉えるには間をつなぐ資料が無いのが現状である。

参考文献

青木豊昭　1976『安保山古墳群』福井県埋蔵文化財調査報告1

赤澤徳明・御嶽貞義　1999『袖高林古墳群』福井県埋蔵文化財調査報告46

赤塚次郎　1992a「端龍寺山山頂墳と山中様式」『弥生文化博物館研究報告』1

赤塚次郎　1992b「山中式土器について」『山中遺跡』愛知県埋蔵文化財センター

赤塚次郎　2003「東海地域としての土器様式」『古墳出現期の土師器と実年代』大阪府文化財センター

秋常山古墳群発掘調査団　1996『寺井町秋常山古墳群』寺井町教育委員会

石川県教育委員会　1973『河北郡宇の気町宇気塚越遺跡』

石川県考古学研究会　1978「江沼古墳群分布調査報告」『石川県考古学研究会々誌』21

伊藤雅文　1989「石川における前半期古墳小考」『石川考古学研究会々誌』32

宇野隆夫ほか　1987『関野古墳群』小矢部市埋蔵文化財調査報告書19

宇野隆夫ほか　1988「谷内16号古墳」『小矢部市埋蔵文化財調査報告書』23

大塚初重　1986「原目山墳墓群」『福井県史』資料編13考古　福井県

大塚初重　1990「原目山墳墓群」『福井市史』資料編1考古　福井市

大谷晃二　1995「弥生墳丘墓における墓上祭祀の一形態」『矢藤治山墳丘墓』矢藤治山墳丘墓発掘調査団

大野英子　2002『千坊山遺跡群試掘調査報告書』婦中町教育委員会

大野　究ほか　2000・2001『柳田布尾山古墳』氷見市教育委員会

荻野繁春　1985『端龍寺山山頂遺跡』岐阜市埋蔵文化財発掘調査報告書

押方みはる・山口正憲ほか　2002『秋葉山古墳群第1・2・3号墳発掘調査報告書―第5～9次調査』海老名市教育委員会

川崎公敏・近藤義行編　1987『芝ヶ原古墳』城陽市埋蔵文化財調査報告書16

北野博司ほか　1987『宿東山遺跡』石川県埋蔵文化財センター

黒坂秀樹ほか　2001『小保利古墳群第1次確認調査報告』高月町教育委員会

小菅波遺跡発掘調査団編　1978『小菅波遺跡発掘調査ニュース』

小嶋芳孝　1983「埴輪以前の古墳祭祀」『石川考古学研究会会誌』26

小森秀三　1979『分校古墳発掘調査報告』加賀市教育委員会

西条古墳群発掘調査団　1964『西条古墳群調査略報』

斎藤忠編　1978『弘法山古墳』松本市教育委員会

斎藤　優・椙山林継・武藤正典編　1966『王山・長泉寺山古墳群』福井県教育委員会

斎藤　優　1979『改訂　松岡古墳群』松岡町教育委員会

塩谷　修　1990「関東地方における古墳出現の背景―とくに古墳祭祀の系譜について―」『土浦市立博物館紀要』第2号

白川　稜編　2002『中角遺跡現地説明会資料』福井県埋蔵文化財調査センター

田中清美　1988「弥生時代前・中期における穿孔・打ち欠きのみられる土器について」『考古学論集』2　考古学を学ぶ会
田中新史　1977「市原市神門四号墳の出現とその系譜」『古代』63
田中新史　1984「出現期古墳の理解と展望―東国神門五号墳の調査と関連して―」『古代』77
谷本鋭次　1970『高松弥生墳丘墓発掘調査報告』津市埋蔵文化財調査報告 4
土屋　積・青木一男・町田勝則　1996『大星山古墳群・北平 1 号墳』上信越自動車道発掘調査報告書 7
栃木英道・大西顕編　2000『金沢市戸水Ｃ遺跡・戸水Ｃ古墳群』石川県埋蔵文化財センター
土肥富士夫　1985『国分岩屋山古墳群』七尾市文化財調査報告 1
富山大学人文学部考古学研究室　1983『国分尼塚古墳群発掘調査報告』第 43 回富山大学考古学談話会発表資料
中屋克彦　1998「石川県鹿西町雨の宮 1 号墳の発掘調査」『古代』105
西原崇浩　2002『高部古墳群Ⅰ―前期古墳の調査―』木更津市教育委員会
榛原町教育委員会・奈良県立柏原考古学研究所　1977『大王山遺跡』
橋本澄夫・谷内尾晋司　1977『鳥屋・高階古墳群分布調査報告』石川県考古学研究会
橋本澄夫　1981「小田中親王塚古墳」『探訪　日本の古墳　東日本編』有斐閣
林　紀昭・山崎秀二　1974『皇子山古墳群』大津市教育委員会
坂　靖志ほか　1993『福井市三尾野古墳群発掘調査報告書』福井市教育委員会
肥後弘幸　1994ab「墓壙内破砕土器供献（上・下）―近畿北部弥生墳墓土器供献の一様相―」『みずほ』12・13
福井県教育委員会　1976「金沢市七ツ塚墳墓群」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』
福井県教育委員会　2000『花野谷古墳群現地説明会資料』
藤田富士夫　1974『富山市杉谷地内埋蔵文化財予備調査報告書』富山市教育委員会
古川　登　1995「発掘調査と問題意識―小羽山墳墓群の調査から―」『長野県考古学会誌』75
古川　登　1997「北陸南西部における弥生時代首長墓の認識―北加賀・越前北部地域の事例から―」『考古学研究』43-4
古川　登　2002「風巻神山 4 号墳の調査」『郷土資料館だより』6　清水町郷土資料館
古川　登　2003a「片山鳥越 5 号墓の調査」『郷土資料館だより』7　清水町郷土資料館
古川　登　2003b「北陸における古墳の出現」『風巻神山古墳群』清水町教育委員会
古屋紀之　1998「墳墓における土器配置の系譜と意義―東日本の古墳時代の開始―」『駿台史学』104
古屋紀之　2002a「墳墓における土器配置から古墳時代の開始に迫る」『弥生の『ムラ』から古墳の『クニ』へ』大学合同考古学シンポジウム実行委員会編
古屋紀之　2002b「古墳出現前後の葬送祭祀―土器・埴輪配置から把握される葬送祭祀の系譜整理―」『日本考古学』14
堀　大介　2002「古墳成立期の土器編年―北陸南西部を中心に―」『朝日山』朝日町文化財調査報告書 3
埋蔵文化財研究会　1989『古墳時代前半期の古墳出土土器の検討』第 25 回埋蔵文化財研究集会
松井正信　1997「乃木山古墳」『発掘された北陸の古墳報告会資料集』まつおか古代フェスティバル実行委員会
まつおか古代フェスティバル実行委員会　1997『発掘された北陸の古墳報告会資料集』
松任市教育委員会　1995『旭遺跡群』Ⅰ～Ⅲ
松本市教育委員会　1993『弘法山古墳出土遺物の再整理』松本市文化財調査報告 111
森下　衛・辻健二郎編　1991『船阪・黒田工業団地予定地内遺跡群発掘調査概報』園部町教育委員会
渡辺博人　1990『加佐美山 1 号墳発掘調査報告書』各務原市文化財調査報告書 7

追記：脱稿後，福井県清水町の風巻神山古墳群の報告書に触れる機会を得，当古墳群の土器配置を知ることができた。3 号墳（円墳　21.5 m　国府クルビ式期）では墳丘構築過程で不整形な窪みをつくりだ

し，そこに壺3個体の破片を埋め込んでいるという。窪みは墳丘盛土でパックされたにもかかわらず，土器片はそろわずほとんど接合しないので，あらかじめ破砕された土器の破片の一部だけを持ち込んでいるようだ。また，主体部から神人龍虎画像鏡の出土をみた4号墳（方墳　16.6×15.1 m　白江式期）では墳丘各辺中央の裾部において土器が出土している。

古川　登ほか　2003『風巻神山古墳群』清水町埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ

Evolution of Burial Mounds in Third Century Hokuriku Region on the Sea of Japan Coast

FURUYA Noriyuki

The author argues that process behind the appearance of giant keyhole-shaped tumuli in Yamato in the middle third century A.D. was not necessarily abrupt, but more gradual, from the standpoint of mortuary rituals conducted on the summit of burial mounds, utilizing pottery. Such rituals may be traced back to the Late Yayoi Period (first and second century A.D.). Rituals that took place on the mound top were common in eastern Japan at the beginning of the Kofun Period. The author has investigated the evidence for such rituals in the Hokuriku region in order to test my hypothesis that these rituals of eastern Japan were in fact originated from the Late Yayoi burial mounds of western Japan. The selection of Hokuriku is appropriate for the following three reasons: 1) archaeological evidence of burial mounds of this time period has recently accumulated considerably; 2) Hokuriku is located in central Japan between the western half and eastern half, and it was a cross-road of interaction between these two halves; and 3) mortuary customs of the Late Yayoi Period was very close to the western Japanese type, but these became very close to the eastern Japanese type in the Early Kofun Period.

Results of the author's analysis show that burial mounds of the Hokuriku region evolved gradually, although some epochs existed. This was also the case for mortuary rituals on the mound top. However, the assemblage of pottery adopted for these rituals in the Hokuriku region was different from the Central Highlands and Kanto region, to the east of Hokuriku. It is difficult to assume relationships between Hokuriku and these regions to the east of it. The origins of mortuary rituals in the Central Highlands and Kanto are traced back to the San'in and the coast of the Inland Sea, but the direct influence seems to have come from southern Kyoto, Shiga, Ise and western Tokai.

Keywords: Mortuary rituals; pottery; Yayoi-Kofun transition (third century A.D.); Protohistoric Japan; regional interaction.